

## イランの農村

—— テヘラン近郊ターレババード  
村における事例研究 ——

岡崎 正孝

はしがき

このレポートは、テヘラン近郊の典型的な村の構造を、主に経済的側面からとらえ、かつ、イランの地主の一形態を明らかにする意図をもってかかれたものである。2年半(1961年3月～1963年9月)の滞在の後半、筆者は、ターレババード村にて実態調査を行っていたテヘラン大学社会科学研究所の Safinejad 氏の紹介でターレババードの地主を知り、以後休日ごとにこの村に赴き地主や農民に接した。ここでは、本格的調査を行なう意図は始めからなく、村民と長く、また、親しく接することにより、普通の社会調査ではつかみえないものを知り、後日行なう実態調査に役立てようと試みた。

イランの農業については、Lambton 女史の *Landlord and Peasant in Persia* 以外にみるべき研究の成果はなく、また、この書においても村の経済構造を把握することは至難である。不十分な調査の結果をもとに、ラフな報告書をまとめたのは、これによって、いささかでもイラン農村の構造が明らかにされればと思ったからである。

なお、Safi 氏は Talebabad と称する膨大な調査報告書の刊行を予定していることを付記しておこう。

### I 村の一般的概況

ターレババード (Talebabad) はテヘランの南東30キロメートルの所に位置している。1962年現在戸数88、人口398人(1959年のセンサスによると341人)、耕地面積約500ヘクタールを有しており、テヘラン州に属する村の平均人口307人(ただし1959年のセンサスによる)、耕地面積594ヘクタールと比較した場合、規模の点ではほぼ典型的な村といえることができる。この村はイランで最も一般的といえる小地主所有村(Khorde Malekの村)であり、さらに小麦、大麦、綿花の生産を中心としている。テヘラン近郊の一部の村にみられる小土地所有に基づく蔬菜類栽培を中心とした近郊農村でも、また、近年イラン各

地に出現しはじめた企業家的に経営される大農場といった、いわば特種な類型に属す村でもなく、この地方に一般的にみられる村の一つである。

この国の大部分を占める高原地方においては、集落は大きな土塀にかこまれているが、ターレババードもその例外ではない。土塀の内側には、れんが製の地主の家、泥製の村民の住居、羊、牛などの家畜小屋、地主の倉庫、モスク、発電所、公衆風呂、公共水汲み場などがあり、すべての村民はここで生活している。この大土塀の外には、土塀でかこまれた養鶏所、果樹園などがあり、これらのほかに500ヘクタールの耕地が延々と広がっている。以上のように、この村の景観もイランの一般的な村のそれとは変わらないのである。

ターレババードはテヘラン、レイ市、またヴァラミン市に近く、これらの諸都市への交通の便に恵まれている。すなわち、ヴァラミン市、レイ市へは、バス、乗合タクシーの便が頻繁にあり(両市までタクシーで約15分)、さらにテヘランへはレイ市よりバスが通っており(約15分)、これらが、この村近辺の村民の主要交通機関となっている。

この村は先にも触れたごとく、小地主所有村であり、現在8人の地主によって所有されている。すなわち、前王朝 Qajar 朝のときに、Falah 氏が王室関係者より購入し、村の開発経営にあたった。かれの死後、この村はイスラーム法に基づき6人の息子と2人の娘に、それぞれ2:1の比率で分けられ、現在はこの8人のものによって所有されているのである(イランでよくみられる、Mosha 型の村である)。遺産相続に際し、土地は相続権者間で細分分割されず、共同で所有され、その収入を各人の share に応じて配分するという形がとられている(注1)。

8人の所有者は、村を兄弟のうちの1人に3カ年契約で lease し、借地人より年70万リアル(350万円相当)の地代を得ている。この地代は8人の地主によって、男2:女1の割合で配分されることになるのである。(すなわち、男の場合10万リアル、女の場合5万リアル)。

はじめは長兄が借地経営していたが、ついで、3男の Q 氏がなり、末弟の A 氏が成人するにおよんで Q 氏は近隣の Qomiabad (モスク所有村)の借地人になり、現在は A 氏がこの村を経営している。

A 氏以外の7人の地主は、農業生産、村落経営に対してなんらの役割も果たしておらず、すべての生産に必要な資本は借地経営者たる A 氏によって提供され、7人の

地主は、完全な Rentner 地主となっている。

(注1) この村の場合、所有者は兄弟であるが、そうでない場合——むしろそのほうが一般的——には、所有者は経営を1人の代理人に委任し、代理人によって集められた小作料を、所有の share に応じて配分しているのが普通である。また、このような村はきわめて多く、イランでは一般的である。

## II 農業生産のメカニズム

### 1. 主要生産物と Cropping Season

この村の耕地面積は約 500 ヘクタールで、その40%を占める200ヘクタールが休閑され、300ヘクタールが作付け地となっている。

1962農業年度における主要作物は、小麦・大麦・綿花・蔬菜類・牧草などで、それらの作付け面積は次表のごとくである。

作物	作付け面積 (ヘクタール)	百分比 (%)
小麦	130	43.3
大麦	40	13.3
綿花	80	26.6
蔬菜	39	13.0
牧草	11	3.8
計	300	100.0

すなわち、穀類生産が60%近くを占め、商品作物たる綿花がそれに続いている。

小麦・大麦は秋播きであるが、ここで簡単に各作物の Cropping Season について述べておこう。

小麦・大麦の場合、耕耘は10月末から11月に行なわれ、11月末から12月初めにかけて播種される。ついで、4月から5月の初めに灌漑され6月に麦刈りが行なわれる。麦栽培のために土地が利用されるのは8カ月間であり、また収穫期を除いて、大きな労働力を必要としない。一方、綿花は12月末より3月末までに2回の耕耘と2回の細耕が行なわれ、ついで播種される。5月末より6月中には、除草が3回ほど行なわれ、6月末より収穫が始まる8月末までに灌漑がなされる。収穫は8月末より12月末頃まで4カ月ほど続いている。すなわち、綿花栽培には年に12カ月にわたる労働が必要となっている。

### 2. 土地利用形態と生産関係

つぎに、作物はいかなるシステムで、生産されているのであろうか。作物ごとに耕作形態が若干異なっているので、個々に述べてゆこう。

まず、全作付け地の82%を占める小麦、大麦、綿花についてであるが、これはボネ制によって生産されている。

ゴルガン地方ならびに米が主要作物であるカスピ海沿岸地方においては、小作人と地主との間に個々に小作契約が結ばれ、小作人は自己の所有する耕牛などの生産手段でもって、一定の小作地において耕作している。しかしこれらエルブルズ山脈以北の地方以外、すなわち、イランの大部を占める地域において個々に小作契約が結ばれるのは一般的ではない。作付け地はいくつかのプロット——耕作単位——に分けられ、各耕作単位に一定数の農民が配属され、これら一群の農民が協業によって農業生産にあたっている。

耕作単位はその規模、呼称に地域差が顕著にみられ、たとえば2人の農民で構成される Joft, いくつかの Joft が一つの単位をなしている Sahara, それにボネなどがある。

テヘラン近郊の村においても土地はいくつかの耕作単位に分けられ、それがボネ (Bone) といわれている。ボネの規模は1日24時間で灌漑しうる土地面積となっており、その村のカナートの数、水の量などによってその面積に差がみられ、また、ボネに配属される農民の数も変わってくる。

ターレババードにおいては、毎年8月22日(イラン暦 Shahrivar 1日)に、借地経営者たるA氏がその年の作物、作付け面積、作付け地などを決定する。そして、小麦、大麦、綿花の作付け地を九つのプロットに分け、それぞれのプロットを組み合わせて一つのボネとしている。すなわち、この村には九つのボネがあるが、各ボネはそれぞれ小麦、大麦、綿花畑を含んでいるのである。

8月22日に、ボネ区割がなされたのち、ボネに働く農民が決められる。まず借地経営者は、村民の中より信頼のおける比較的農耕技術を有した農民9人を選び、各ボネの責任者の地位に任ずる。Auyar と呼ばれるこれら責任者は、地主立ち合いのもとにくじ引き (Peshek, または Qolehkashi) を行ない、ここでそれぞれの担当するボネ地が決められる。ついで、Auyar のもとで働く5人の農民 (Barzegar, Zare', Raiyat などといわれる) が決められるが、この決定権は Auyar にある。Auyar はチームワークも考え、村民の中より5人を選び、ここにボネに働く6人のメンバーがそろうことになる。

この6人の農民が一つのボネで共同作業をし、農業生産にあたるが、かれらはなんらの生産手段ももたず、ただ労働のみを提供するにとどまっている。すなわち、耕耘は村内に住むトラクターの Custom Worker によってなされ、賃耕費は借地経営者が負担している。また、種

子、綿花に与えられる肥料なども経営者がこれを提供しさらに農耕に必要なクワ、シャベル、など小農具もボネごとに一定数のものが経営者によって供給されている。

ボネ・メンバーは、これら経営者より与えられた生産手段でもって、経営者の監督指揮下に、完全な協業を行なうことになる。協業が原則であるので、ボネ・メンバーは同一量の労働を行なうことになっているが、一時的な病気などの場合、若干休むことは、かれらが相互に認めあっている。ただ、病気が長期にわたるような場合には、自己の負担で代理を選び、かれにボネ内での労働を代わってもらるか、もしくは、経営者との間でそれまでの清算をし、ボネより脱退しなくてはならない。ボネ内での労働は、メンバーの協業によっているので、家族労働の参加はみられない。

ボネ内における労働はボネ・メンバーによってなされるのが建前となっているが、麦収穫期、綿花除草期、綿花収穫期など農繁期には、臨時雇い労働者の導入がみられる。労働者の雇用は経営者の判断によってなされるが、上記の農繁期には多量の労働力が臨時に導入されることが習慣となっている。この場合、労働者の労賃は経営者とボネ・メンバーが折半負担している。

農業労働はすべて経営者によって監督・指揮される。経営者の命令は、その下士官的役割を果たす Mobasher を通して Auyar に伝えられ、ついで、ボネ・メンバーに伝えられる。Mobasher は Kadkhoda と呼ばれ、農事作業についての指揮、また実際の農作業を監督するのがその役割となっている。

ボネで働く農民は、経営者によって土地・水、農機具、種子、肥料など生産諸手段、それに住宅を提供され、経営者の指揮・監督のもとに働いているが、この種農民もカスビ海地方などにみられる純粋な小作人と区別されることなく、分益小作農と称されている。しかし、かれらはなんらの生産手段も提供していないのみか、作物選択の自由も、また労働そのものにも自主性がなく、完全な農業労働者といわれねばならない。ただ、後に述べるように、収穫物は麦の場合農民3分の1、綿については2分の1の比率で経営者と農民の間で配分されているが、これは、労働の報酬が share cropping 制によって支払われているにすぎないのであり、かれらは実質的には share cropper 的賃労働者なのである。

綿花・小麦・大麦などは上に述べたように、ボネ制によって生産されているが、蔬菜、牧草、果樹園については、ボネ制が適用されていない。

蔬菜類生産は、1959年に始められた。経営者はレイ市より蔬菜栽培の技術を有している農民3人を雇い、かれらと労働契約を結んで、その生産にあたらせている。この場合も、耕耘は経営者が行ない、クワ・スキ、種子・肥料、水、住宅などすべて経営者が提供し、かれら3人の農民は労働のみを提供している。賃金支払いはボネにおけるそれと同じ形態をとっており、生産物が経営者によって販売されたのち、その販売代金が経営者と農民との間で折半されている。

果樹園は比較的早くより経営され、ザクロのほか、ポプラが植えられている。この場合、経営者は村内より2人の農民を選び、かれらと文書による5カ年間の労働契約を結んで、生産、果樹園の管理にあたらせている。

労賃支払い形態も、前記蔬菜園労働者の場合と同じく売り上げ金折半の方式がとられ、またすべての生産手段も経営者が提供している。菜園労働者、果樹園労働者とも、労働はすべて Mobasher を通して経営者によって指揮監督されていることは、ボネの場合と同じである。

耕耘手段とともに、重要な生産手段の一つである水であるが、ターレババードにおいても他の村と同じくカナート（地下灌漑溝）によって供給されている。カナートについてはこれまで数多くの人によって紹介されておりここに再度説明する必要はないと思うが、あえてその構造を簡単に説明しよう。

まず、山のふもとに伏水として流れる水を掘りあて（これが母泉 madar chah となる）、ついで15~30メートル間隔で堅穴を掘ってゆく。これらの堅穴はゆるやかな傾斜をもった横穴で結ばれ、これが地表に現われて開渠（mazhar）となる。ついで、これがいくつかの水路で村内の公共水汲み場、耕地に導かれてゆく。

この村には二つのカナートがあるが、これらは現所有者の父によって掘られたものである。このカナートは比較的水量に恵まれ、母泉の深さも27メートルと浅く、また母泉より開渠までの距離も15キロメートルくらいで非常に短い。堅穴はその構造上崩壊しやすいが、1962年にはレンガ性の枠（kaval）をやく窯を作り、この kaval によって堅穴を補強している。

横穴には土砂がつまるので、毎年部分的に修復が必要であり、井戸掘り職人たるモカーニ（moghani）が雇われている。

カナートの修復に要する費用は、すべて経営者の負担となっているが、水路保持はボネ労働者など農民の負担

となっている。

ボネに対しては1日単位でボネごとに、作物別に水が配分されるが、配分の順序は経営者によって決められ、これが mobasher を通してボネ責任者たる Auyar に伝えられ、灌漑が行なわれる。

耕耘はすべてトラクターによってなされ、賃耕費は経営者が負担していることは前述したが、ここで主要な生産手段の一つであるトラクターについて言及しよう。

経営者は以前多くの耕牛を所有していたが、それらを売却して2台のトラクターを1956年に購入した。

Gorgan 地方の大農場においては、トラクター、コンバインが経営上の必要性より導入されているが、この村の場合には、労働力の不足、また、放牧地難による耕牛の飼育難などがトラクター耕耘を必要ならしめたわけではない。それは上記のような要因によってではなく、経営者が深耕による生産増を期待したのと、トラクター輸入業者の宣伝、また近隣の村における地主によるトラクター耕耘の採用の影響などが、インセンティブとなったと考えられる。

トラクターの導入前後において、作付け面積・ボネ労働者数などに変化がみられず、また、経営形態になんらの変化も認められず、ただ耕耘法における変化のみにとどまっている。

導入後、2年間、経営者がトラクターを所有し、これで耕耘していたが、ついで当時のトラクター運転手にこれを売却した。トラクターを所有しえた運転手は、経営者の支配より脱し独立経営体として Custom Worker になり、ターレババードの全作付け地をはじめ、近隣の村の賃耕を始めた。

すでに述べたように、トラクターの導入は経営面で基本的な変化を招来しなかったが、ただいくつもの小さな変化をもたらした。すなわち、以前ボネのメンバーは耕耘に責任をもつものと、灌漑係の二つのグループに分けられ、協業に基づく分業が行なわれていたが、トラクターの導入後その必要がなくなり、6人のメンバーによる完全な協業が行なわれるようになった。また、以前、耕牛用のスキなどの修理を行なう鍛冶屋 (Ahangar) が村にいたが、牛耕の廃止に伴い Ahangar が不用になったことなどがあげられよう (Ahangar には経営者より現物、現金による年俵が支給されていた。なお、現在は、ボネ労働者となっている)。

### 3. 耕作法

麦・綿花の耕耘は、すでにみたようにトラクターによ

ってなされている。綿の播種は平板な土地に行なわれるのではなく、30センチメートルほどの高さのウネを作りそこに播かれる。これには相当量の労働が必要とされるが、すべてボネ・メンバーの手労働によってなされる。発芽後には灌漑、3回にわたる除草が行なわれたのち収穫されるが、このうちボネ・メンバーだけでなされるのは灌漑のみである。除草・収穫は6人の労働力では行ないえず、臨時雇い労働者が雇い入れられる。すなわち、他地方より季節的に移動してくる労働者群に請負制によって除草作業がまかされ、ボネ・メンバーはかれらを指導・監督して作業を進捗させている。また、収穫期には村内の失業者や婦女子、また、村外よりの労働者が雇われ、これら労働者とボネ・メンバーによって綿つみ作業が行なわれる。この場合の労賃はでき高制によって支払われている。

麦の場合、綿ほど労働集約的でなく、必要な作業は耕耘、播種、灌漑、収穫のみである。そのうち、ボネ・メンバーのみによって行なわれるのは播種、灌漑で収穫は Derougar と称される臨時雇い麦刈り労働者によってなされる。ボネ・メンバーは、この場合麦刈り労働者を監督するほか、刈り取られた小麦を小麦畑内に設けられた打穀場まで運搬する。刈り取りの数日後には、トラクターによって脱穀が行なわれ、そののちに打穀場においてボネ・メンバーと経営者間で収穫物の配分が行なわれることになる。

麦刈り労働者の労賃は、請負制によって支払われるのは除草労働者の場合と変わらない。

労賃はでき高払いにし、請負制により、その負担は経営者と農民とで折半することになっている。

つぎに、季節移動労働者の出稼ぎ型態について略述する。

この村が受け入れている季節労働者は、綿花栽培において主要な労働の一つである除草、麦の栽培過程で最も労働力を必要とする収穫過程に採り入れられ、ボネ内労働の相当大きなウエイトを占めている。

耕地面積に対し労働力が不足している村では、短期間に行なわねばならない麦刈り期に労働力の不足をきたし、また、地域差によって収穫期にずれがあるので、麦刈り労働者群の移動がイラン各地で相当活発にみられる。とくに、近年水不足によって耕作しえなくなった所があり、これらの地方からの移動がはげしくなっている。

ターレババードでは、1963年に幾組もの麦刈り労働者群がはいっているが、その流出先は Hamadan, (370キロ

メートル), Khorasan (800キロメートル), Shiraz (900キロメートル) など, 相当遠方に及んでいる。

また, 出稼ぎ形態もそれまで見られた収穫期のずれを利用した短期間の出稼ぎというよりは, むしろ水不足による耕地面積の狭少化によって生産よりはみだされた農民が移動労働者化しているのが, 近來の傾向である。

たとえば, Shiraz グループ (Shah-Reza 郡) の16人は, 1962年には出稼ぎに出ていなかったが, 1963年には水不足で農耕しえなくなり, やむなく臨時雇い労働者として仕事を求め各地を移動するようになった。

かれらは4月より7月までの予定で出稼ぎに出, テヘラン近郊の村で臨時雇い労働者となったのち, この村に來たもので, 7月に Shiraz にもどってからも, 他の地方にふたたび出稼ぎに出ることを計画している。また, khorasan グループは, 土地改革法の適用を受け土地所有者となったが, 配分を受けた土地は非灌漑地で耕作しえず, ために3月下旬よりテヘランに來て, 工場の日雇い労働者, レイ市において大工仕事などをしたのち, この村に來て麦刈り労働者となったものである。かれらの場合にも7月にもどる予定をしているが, ついで他地方への出稼ぎをもくろんでいる。

また, 綿の除草労働者の場合にも, 麦刈り労働者同様かなり遠方より來ており, さらに農閑期のみ出稼ぎというよりは, 機能的に移動労働者化している場合が多くなっている。

これら労働者は経営者と直接交渉し, 仕事をうる場合もあるが, 仲介人を通して雇用の機会を得ているのが普通である。すなわち, いく組もの労働者群を支配下におき, かれらに仕事を周せんする業者がおり, かれが労働者より手数料 (約10分の1に相当) をとって, 地主 (経営者) に労働者を紹介している。この村に來たいく組もの労働者群の中でも, 2~3人の少数グループで來ている khorasan 組を除き, すべて仲介商人を通してこの村にはいつてきている。

#### 4. 生産物の分配と農家経済

1961, 62年とも, 収穫についての正確なデータをつかむことはできなかったが, ボネごとの聞き取り, その他より判断して小麦の場合には播種量の約20倍の収穫があげられていると考えられる(註2)。

小麦の播種量はヘクタール当たり115キログラム弱であるから, 収穫は1ヘクタール2.3トンになる。また, 綿花はヘクタール当たり2.4トン (8 kharvar) くらいと推察(註3)されている。

さて, ボネで生産された小麦・大麦・綿花は, 形態上は crop share の形をとり, 経営者とボネ・メンバーの間で配分される。すなわち, 前述のごとく小麦・大麦の場合には収穫の3分の1, 綿花は2分の1がボネ・メンバーの取り分となる。これよりメンバーの半額負担となっている雇用労働者の労賃が差し引かれ, それが6人のボネ・メンバーの間で均分される。麦の場合には, 現物で打穀場において, また, 綿花については経営者が綿の販売後現金で支給される。

以上のような方法で生産物が配分されるのであるが, それが crop-share 的であることより, 経営者とボネ・メンバーは地主・小作関係にあり, また地主の取り分はそれが小作料であるといわれてき, またそのように理解されてきていた。しかし, われわれがすでに認知したように, ボネ・メンバーはなんら生産手段を所有していないばかりか, 作物選択の自由も, 農事作業の面での自主・独立性もなく, 完全に経営者側の指示によって労働のみを提供しているにすぎないのである。かれらは皮相的に小作人的であるようにみえるが, 実質は定傭の労働者にすぎないのである。

収穫後, 形としては収穫物が両方で配分されるようになっているが, それは業績給的な意味をもった歩合給となっていると考えるべきであろう(註4)。

では, 個々のボネ労働者は1年間の労働の代償としてどのくらいの所得を得ているのであろうか。一つのボネ (Bone M) を例にとってみよう。

このボネの作付面積, 収穫, 労賃負担額は次表のごとくである。

	播種地面積 (ヘクタール)	収 穫(トン)	労賃負担額 (リアル)
小麦	16	39	} 10,000
大麦	8	24	
綿	6	9.6	

これより計算すると, 1人のボネ労働者が受け取るのは, 小麦2.17トン, 大麦1.33トン, 綿533キログラムとなる。今, これを1キログラム当たり小麦6リアル, 大麦3.3リアル, 綿花14リアルとして計算すると, 総額2万4853リアルとなり, これより労賃負担分の個人負担額2166リアルを差し引くと, 2万2687リアル(註5)となる。これが, ボネで働く農民(註6)の年間総所得となる。

ボネ・労働者などの農業労働者, 社会的機能を果たす労働者などは, 小麦収穫後の2カ月を除く, 10カ月間, 経営者より現物・現金による前貸しをうけている。小麦は毎月90キログラム (これは5人家族の1カ月の消費量

に相当する), 現金が200リアル(無利子)与えられているが, これも労賃支払い期に決済される。

村内には2軒の店舗があり, 村民はここで肉, 油などの食料をはじめ, 生活必需品を購入(注7)するが, この場合現金取引が行なわれることは少なく, 店が発行している金券(mohre)によるか, または掛買いをしている。

これらの買掛金は, 収穫期後に現金もしくは現物で清算されるが, 一般にかれらの負債額は所得に比し多額に達しており, 負債が翌年度にもちこされるケースがきわめて多い。例をあげると, ある労働者は綿花より1万リアル収入を得たが, そのすべてを買掛金の返済にあて, さらに4000リアルの負債を残している。別の例では8000リアルの現金収入のうち, 6000リアルを店への返済にあて, 4000リアルの負債が残っている。このような例はけっして例外ではなく, ほとんどの農民が店舗への負債に苦しんでいるといえよう。

ここで, 1農家(ボネ労働者)の収穫物配分時におけるラフな収支計算をすると, つぎのようになる。

収 入	支 出
現物(小麦)1,500kg (大麦) 450kg	地主への小麦前借返済 900kg
現金(綿花)8,000Rls	地主への現金前借返済 2,000Rls
	店舗への負債返済 6,000Rls (負債残額 4,000Rls)

すなわち, 収穫後においてわずかに, 大麦450キログラムと小麦600キログラムが手中に残るにすぎないのである。これが, 村内でも経済的に比較的恵まれたボネ労働者の例であり, 下層農家の場合には, さらに劣悪な経済生活を強いられているのである。

労働者推定年間所得

	推定年間所得 (Rls)	ドル換算額
Mobasher	88,584	1,181
Dashteban	73,584	981
トラック運転手	72,000	960
Mollah	23,400	312
ボネ労働者	22,687	302
浴場労働者	22,000	293
トラック助手	21,600	288
養鶏労働者(A,B)	18,360	244
モータ係	16,200	216
養鶏労働者(C)	14,600	194
Chupan	12,000	160
牛飼	7,200	96
1人当たり国民所得	11,427	152
1戸あたり人口(Tehran)	4.2人	
1戸あたり平均所得	47,993	640

### 5. 農業経営の多角化

経営者はボネによって小麦・大麦・綿花を生産するほか, 近年その経営を拡大し, 蔬菜栽培, 養鶏などを行ないはじめた。

ターレババードはイランにおける最大の卵消費地であるテヘランを hinterland としてもつという有利さにより, 経営者は4年前に3000羽ほどの鶏を収用しうる養鶏所を作り, 直接経営を始めた。

養鶏の経験をもたなかったが, 経験者より指導をうけるほか, 鶏保温用に新たに自家発電所を作るなど, 相当活発にその経営に乗り出した。

労働力は村内外より調達し, 現在4人の養鶏労働者が年契約で働いている。4人のうち3人は月給制で, 月1350~1500リアルの現金と60キログラムの小麦が給付され, 残る1人は日給40リアルを得ている。かれらの所得は年に約2万リアルから2万2000リアルになっており, まずボネ労働者なみの待遇をうけていることになる。日々の work routine のほかの労働の指示は, 経営者によってなされ, Mobasher を通してかれら労働者に伝えられている。

このように, 経営者が従来の伝統的作物, 耕作法のみならず, 新たに蔬菜栽培, 養鶏などに営利の目を向けはじめたことは, まず注目し値しよう。

(注2) イランでは, 播種量の倍数で収穫高が示されている。

(注3) これらの数値は, イラン平均の小麦1.22トン/ヘクタール, 綿花0.92トン/ヘクタールをはるかに上回っているが, これは地力・水の量・経営者の生産に対する意欲, などに起因するものと考えられよう。

(注4) 落ち穂拾いの権利はだれにでも与えられているので, 村内の下層農家の落ち穂拾い作業が顕著にみられる。また, これら落ち穂を追って移動する落ち穂拾い労働者群も見られる。

(注5) イランの1人当たり国民所得は, 1万1427リアル(152ドル)と推定されている(出所: Estimate of national income of Iran 1337 (1958) Pean Organization)。

(注6) 家族内に1人以上のボネ労働者がいる場合には, 所得は2倍になる。

(注7) 村外からくる行商人より, 物々交換, 現金購入などをする場合もあるが, このウエイトは低い。

### III 社会構成

この村には, 性格的に異なる2種の階層がある。すなわち, ボネ労働者, 他の農業労働者など経営者の支配下

にあり経済的に独立していない層と、トラクター賃耕業者、店舗所有者など、経営者の直接の支配をうけない独立的経営体をなしているものとの二つである。本章では、これらの階層の中における構成分子を職掌別、機能別に説明し、ついでこれら階層間の支配関係に触れることにする。

1. 労働者諸階層（非独立的階層）

(1) 生産的機能を果たす諸階層

(a) ボネ労働者 (Barzegar) 54人

この村の主要生産物たる麦・綿花生産にたずさわっている Share-cropper 的労働者で、88家族より54人がこれに配属されている。諸階層の中で最も大きなグループを形成しており、正確な労働人口は不明であるが、総労働人口の約半分を占めると考えてよいであろう。

(b) 蔬菜園労働者 (Sabzikari) 3人

3年前に経営者が始めた蔬菜栽培に従事し、収穫物より share の形で労賃をうけとる労働者である。この職掌では栽培技術が要求されているので、他の職掌とくらべ、労働者の固定化がみられる。

(c) 果樹園労働者 (Baghban) 2人

5年間にわたる労働契約によって、果樹園労働を行なうもので、前記蔬菜園労働者とは異なり、特殊な技術を要しないため、村内の農民よりあてられている。

(d) 養鶏労働者 (Morghdari) 4人

養鶏所に働き、月給制による定額賃金を受け取っているが、労働期間に固定制がなく毎年そのメンバーには変動がみられる。

(e) 牧童 (Chupan) 3人

経営者は500頭ほどの羊を所有し、また村内にも、羊所有農家が数戸あり、村内で総数600頭ほどの羊がいる。これらの羊は昼間特定のものにまかされ、かれらが村内外の放牧の世話をする。これが牧童で、この村には3人いる。かれら牧童は、村内の少年、もしくは、下層農家より選ばれるのが常である。また羊所有者は、1頭につき月5リアル（600頭で3000リアル、1人1000リアルとなる）支払うことになっている。

(f) 牛飼い (Gavcheran) 1人

羊と同じく経営者の所有する牛をはじめ、村内にいる30頭ばかりの牛は、牛飼い労働者にその放牧が委託されている。かれも、牧童と同じくこの村の最底辺に屈しており、老人がこれにあたるのが常となっている。労賃も前記羊の場合と同じく、毎月1頭につき20リアルの割で支払われている。

(g) トラック運転手 2人

1962年に経営者は1台のトラックを購入し、運転手を1人6000リアルの月給で雇用した。もちろん、村内には運転能力を有するものはなく、近くのレイ市で運転手をしていたものが雇われた。

また、その助手として、ボネ労働者の息子が月給1800Rlsで雇用されている。

(h) 発電機係 (Motorche) 1人

1962年に、養鶏所の保温用、経営者の自家消費、村落内の街灯用として、発電機が導入されたが、発電機係として村外より1人の労働者が雇い入れられている。発電は日没後より深夜12時頃まで行なわれるのみで、この時間内の労働をすればよいことになっている。日給制で労賃が支払われており、1日45リアルとなっている。

(i) 失業者 (Amaleh) 約20人

年度初めに経営者よりなんの仕事を与えられなかったもので、その正確な数値を把握することはできなかったが、比較的多く、約20人くらいに達するものと推定される。かれらは労働の質も低く、村内で最も底辺を形成している。定職はないが、ボネ、蔬菜園などで臨時に労働力の必要が生じたときに、日雇い労働者になり、生計を維持している。ボネ労働者でも先にみたように、低所得にあまんでいるが、かれら失業者はそれ以下の生活をしいられている。

(2) 社会的機能を果たす諸階層

(a) 公衆浴場係 (Hammami) 1人

この村には地主が建てた風呂があり、その清掃と風呂たきを行なわせるために、1人の村民があてられている。浴場は毎日午前10時より午後7時まで開放されており、村民が何時でも利用できるようになっている。

利用者は男の場合1人につき年間22.5キログラムの小麦と、同量の大麦（両方で210リアルに相当する）、女は1回の入浴につき5リアル、もしくはパン1個を、浴場係に支払っている（親の助けなくして入浴しうる子供は無料）。

燃料は動物の糞、砂漠に生えている灌木、草類などが使われるが、これらを集めるのも浴場係の責任となっている。

浴場係も年度初めに経営者が決めるが、一応、経験のあるものがあてられるのが普通である（現浴場係は昨年ボネ労働者であったが、その父は長く浴場係をつとめており、今も父が助けている）。

(b) 門番 (Darbazaban) 1人

村民の住居は大きな土塀によってかこまれていることは、すでにのべたとおりである。これに家畜専用と村民専用の二つの門があるが、この門の開閉を行なう門番がおかれている。経営者よりは給料が与えられていないが、門を利用する者から月に5リアルずつ徴収しているほか養鶏労働者も兼ねている。

(c) モスクの僧侶 (Mollah) 1人

ここには1916年に前地主によって建てられたモスクがあるが、そのときに地主が Balchestan 地方より招いた僧侶が、現在もこのモスクの mollah となっている。mollah は毎日の5回のお祈りのほかに、Mohar-ram, Ramazan などの宗教行事を勤めている。かれは経営者より月に1800リアルの現金と75キログラムの小麦を手当として受け取っているほか(総額1950リアル相当)、村民が適時出す布施がその収入源となっている。

(d) 産婆 (Mama) 1人

平常日雇い労働を行なっている1人の寡婦が、産婆の役割をも果たしている。産婆は村の正規の職掌では

なく、経営者より支払われていない。

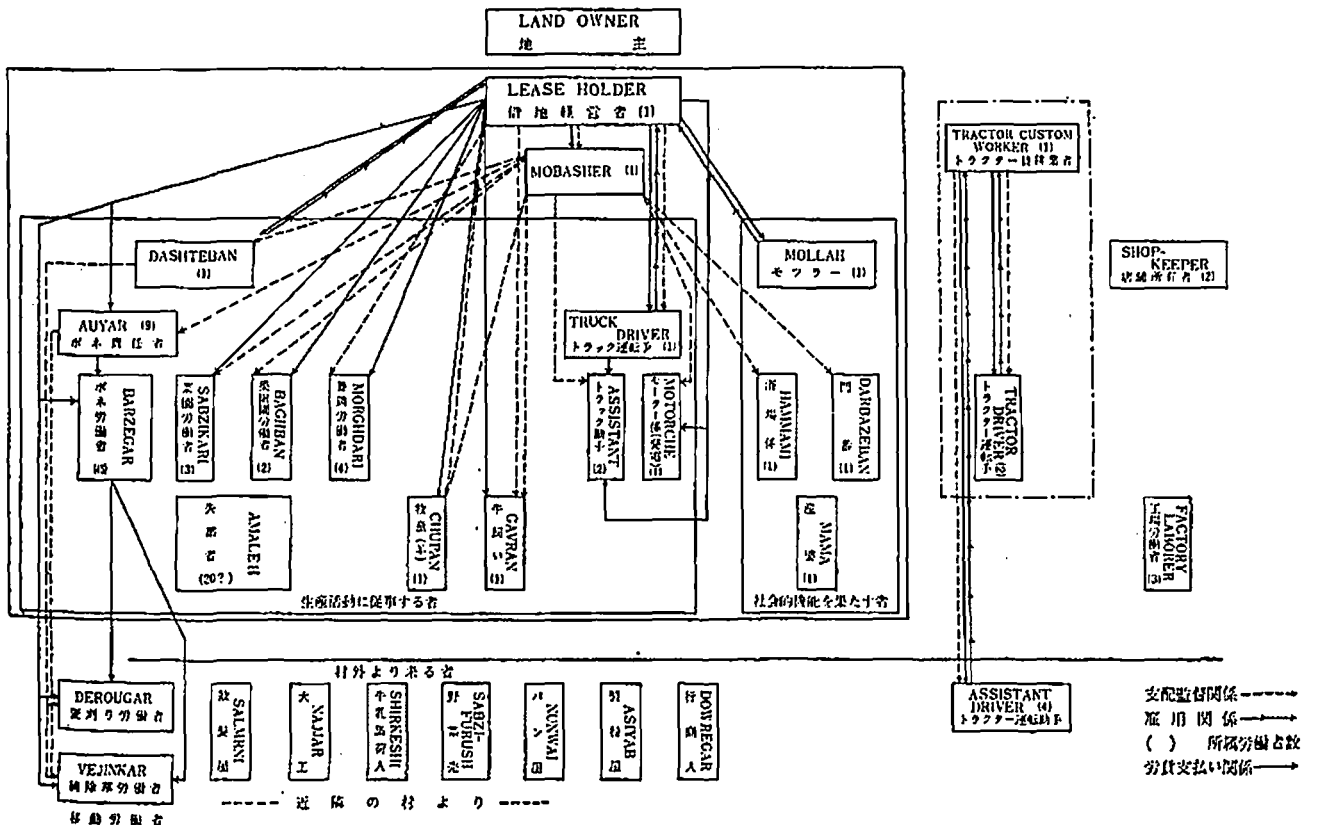
この村には上に列挙したような諸職掌があり、これらに一定数の村民が配属され、村の生産活動、社会的機能が果たされている。これらの職掌への配属は、果樹園労働者、トラック運転手、Mollah などを除き、毎年年度初めに経営者によって決められている。経営者は各人の能力のみを評価して決めているので、労働の質の悪いもの、怠惰、不誠実なものには職が与えられなくなっている。職掌による労働者の固定化はなく、労働者自体の能力によって、上昇と下降の現象が起こっている。図は1962, 63年の間におけるその変化を示したものであるが、これによっても毎年職掌間にはげしい移動のあることが明らかであろう。

村内でも経済的・社会的に高い地位にある Dashteban がその地位を失って下降し、工場労働者化し、その後任にボネ責任者の1人が昇格していることと、村外からの流入が比較的多いことなどは注目すべき移動といえよう。

2. 独立経営体

(a) 店舗経営者

ターレババードの社会構成





すでに述べたように、この村には2戸の店舗がある。この経営者たち同様に地主所有の泥製の家に住んでいるが、他の村民のごとく無料でなく、月600リアルの家賃を支払っている。

油、砂糖などの食料品をはじめ、衣料、その他の生活必需品を、テヘランの3割高くらいの価格で売るほか、掛売りなども通して、その経済力を大きく伸張させており、トラクター賃耕者とともに、経済力において他の村民とは大きくかけはなれている。ターレババードには、Meccaに巡礼したもの(Haji)が2人いるが、かれら店舗経営者2人がそのHajiであることから、経済力的一端がうかがえよう。

かれらの経済力はきわめて高く、またHajiは普通は尊敬されているのであるが、村民の間では社会的にけっして高く評価されていないのが実状である。それもかれらが伸張したのは直接村民よりの収奪を通してであるという村民の一般的感情に起因しているからと考えられよう。

かれらのうちの1人は、比較的古くより、すなわち前地主経営下にあったときより、この村にて店をもっていたが、他の1人がこの村に来たのは古いことではない。かれはもとEsfaban地方の村で店をもっていたが、たまたま、その親戚にあたるものがこの村でMobasherをしており、かれの紹介でターレババードで開店した。

#### (b) トラクター賃耕業者 (Custom Worker)

この村に2台のトラクターが賃耕業者によって所有されていることは、すでに述べたとおりである。

この賃耕業者は以前、近隣のChaleh Tarkhan村にいたが、9年前(1954年)に父(ボネ労働者)のもとを去り、ターレババードにてボネ労働者となった。ついで当時の経営者にその才能を認められ20代の青年であったにもかかわらず、入村後2年(1956年)にして村民の中で最も高い地位にあるMobasherに選ばれた。そして、経営者の購入したトラクターの運転手も兼ねるようになった。かれが兼任するようになったのは、軍隊時代に修得した技術がかわれたものと思われる。1958年には経営者が1956年に購入したトラクターを、弟と近親の青年との3人の共同出資で買い取り、Mobasherをやめ完全に独立したCustom Workerになった。経営者より購入したトラクターはその後使用しえなくなり、1960年にはAgricultural Machinery Development Bongah (Plan Organization)のローン

(4年年賦)をうけ、2台のトラクター(1台は75万リアル、他は中古で52万リアル、ともに75HP)を新たに購入した。

最大の出資者であり、リーダーシップを握っているこの業者自身は、運転などの労働をいっさい行なわず、それらは他の2人の共同出資者と、6人の助手(うち2人は村内の青年、他は村外より)に行なわせ、本人は経営者のになっている。

機械化の中心地Gorganでは、このような小経営者による機械の過剰導入、それに伴う没落が始まっているが、テヘラン近辺ではまだトラクター密度が小さいので、トラクター業者間の競争も少なく、また逆にかれらに対する需要が高まりつつあり、Custom Workerは経営に成功している場合が多い。この村のCustom Workerは、ターレババードの300ヘクタールのほかに、近隣のGomiabad, Chaleh Tarkhanなどでも賃耕を行ない、かなりの賃耕費収入をあげ、その経済力を伸張させている。(ターレババードのみで年に44万リアルの賃耕費収入がある)。

かれは伸びつつある経済力、教育などを背景に村内においてMobasherよりも高い、社会的・経済的地位を保っているが、同じ独立経営体で経済力の点でも強い力をもっている店舗所有者、また、他の村民と比較した場合、その地主、経営者に対する態度が対等的であるのはきわめて特徴的である。また、現在このように高い地位にあるが、10年前には社会の底辺に位置していたことも特筆されるべきであろう。このような短期間における上昇、また下降の現象は、けっして例外的事例ではなく、他の分野においてもみられることである。村には前近代的な雰意気がただよっていながらも、いわゆる封建的な社会的規制がなく、さらにイスラームの平等意識も援因して、このようなことがなんらの社会的抵抗なく可能となっているのである。

#### (c) 工場労働者 3人

特徴的なものはこの村に住む3人の工場労働者である。かれらは地主所有の家に住み、近くのReyの町にある工場に働きに行っている。この3人は村でなんらの生産的・社会的機能を果たしていないにもかかわらず、経営者によって無料で提供された家に住み、村内のすべての施設を利用しているのである。

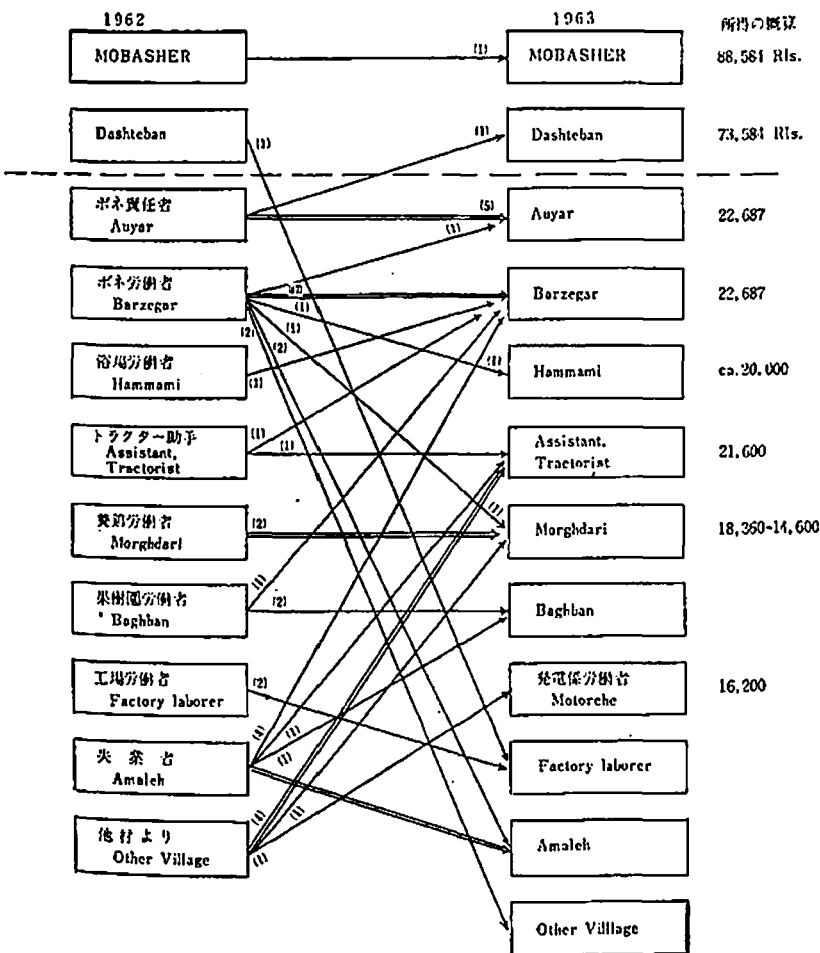
3人のうち2人は、農民の子であるが、うち1人は前Dashtebanで村内でも社会的・経済的地位も高く農民を支配する地位にあった。しかし、経営者と紛争

をおこし Dashteban の地位を追われ、また、村内におけるいかなる生産活動をも行ないえなくなり、やむなく低給の日雇い工場労働者となった。

かれの場合、当然村より追放されることが予想されたのであるが、経営者はあえて村にとどまることをすすめ、現在でも村より通勤している。このことは、一種の経営者の恩恵と考えられるかもしれないが、実は別の意味をもっている。すなわち、イランでは耕地面積が大きいということと、人口が多いことが、村の価値を決める大きな要素となっている。人口が多いということは、それだけで村の価値を高めることになるので、かりに一時的に不必要なものでも村にとどめているほうが地主にとって得策なのである（この事実、村民を人格的に村に緊縛することを示すものではけっしてない）。

名目的に独立経営体をなしている店舗所有者、工場労働者などは、実質的には間接に経営者の支配下にあり、

1962~63年における階層の移動



Custom Worker のみが完全な独立的・自主的地位を保っている。一方ボネ労働者をはじめとする農業労働者階層、不定期に農業生産に参加する失業者、村内の社会的機能を果たすものなどは、すべてその経済生活も完全に経営者の支配下におかれ、なんらの自主的・独立性を保つことはできなくなっている。かれらにとっての上昇の機会、本人の努力など自己の力によってではなく、経営者に認められて Dashteban, Mobasher などの特殊な地位につくこと以外に、その機会とは与えられていない。share cropping 別になっているとはいえ、各人の努力による増収はけっして1人の者のみに還元されるのではなく、グループに還元されるので、その点でも一つの旧来の職掌内において勤勉による経済力の上昇をはかることなどはできない。

労働者に対する労働の指揮、監督などは経営者によってなされているが、支配のパイプラインを構成しているのは、経営者—Mobasher の線である。Mobasher は村内の経営者の支配下にあるすべての構成分子に対し支配的地位にあり、かれらを指揮・監督している。この村では、経営者が地主であり、経営権は Mobasher の手にないので、他の不在地主村におけるほどその地位が高くないが、かれが農民を実質的に支配する地位にあるので、一般労働者とは異質のものとされるべきであろう。すなわちこの村において上部構造として、地主、経営者、Mobasher の3階層が重層的に考えられるのである。

これらの下に下部構造として労働者群が存在するが、その中には、職掌の責任者の性格を有している、Auyar (ボネ責任者)、トラック運転手が頂上に、ついでボネ労働者など諸職掌に配属されている労働者が続いている。(これら労働者間には、階層意識が存せず、みな平等観をもっている)。

そして、つぎに、Chupan, Gavran, 失業者などが、社会の最下層を形成している。

この社会では異質分子たる Custom Worker, 店舗所有者、工場労働者は、それぞれつぎのような地位を占めている。すなわち、Custom Worker はすでに Mobasher もつとめており、現在では数人の労働者を有する経営者になっており、経済力においても、また教育水準(広い意味での)の点でも他の農民

とは隔絶され、Mobasher と経営者との中間に位置しているといえる。つぎの、店舗所有者は、経済力の点では高位にあるが、村民の意識その他よりして Auyar 以上にはみられていない。工場労働者についても、農民の value system では農業以外の工場労働などは非常に低く評価されており、その上、かれらの所得も農業労働者程度にすぎないので、農業労働者よりも低位にみられ、最下層の階層の中に入れられている。

経営者の支配下にある労働者について、特殊なのは、技術関係労働者と Mollah であろう。すなわち前者の場合、その所得は（トラック運転手などの例外を除き）けっして高くないが、かれらが一般農民が修得しえない特殊技術を身につけていることが、同じ労働者群の中でもかれらの社会的地位を高める要因となっている。また、mollah も、経済力の点では労働者階層と変わるところないが、宗教が生活に密着している社会における宗教生活の指導者として、高い地位を与えられている。

つぎに村の自治についてであるが、これは、経営者によって握られている。たとえば、村内において起こった紛争、その他の小さな犯罪はすべて経営者によって調停され、ごく特殊なケースのみについて警察にその解決がゆだねられている。また、村と外部社会との公的接触はすべて経営者の手を通してなされている。村には法律によって作られた村議会 (Anjomane Deh) があり、それが名目上、村の最高の決定機関となっているが、事実上なんらの機能も果たしておらず、この機能も経営者によって果たされている。

## む す び

ここの地主はなんら生産的役割を果たさず、完全に地代よりの収入をうることにのみに関心を有している。この点、純粋な Rentner 地主である。一方、地主の 1 人でもある借地経営者は、必要なすべての生産手段を提供し、農作業の指揮・監督にまで関与している点企業者的といえよう。ただ企業者的といいながらも、近代的な企業者意識をもって村の経営を行なっているのではなく、すなわち、「経済を動かす先駆者」としてではなく、「単なる業主」として、伝統的な古いふんいきの中で旧来とは異なるやや新しい意識をもって経営を行なっているにすぎない。村に住み村経営を本業としているこの経営者は、かれ自身農業者であり、農業生産の向上のためカギを握っている。近年、新しい農業の展開に主導的役割を果た

す「先駆者」的地主が出現しました、それに追従する地主が続出している。すなわち、横盛な企業心とより高度な知識を有した地主が、旧来の伝統的な農業を墨守していた多くの地主を覚醒し、かれらをして新なる営利に目を向けさせたのである。この村の経営者も、後者の例の一つの典型である。小麦・大麦・綿の栽培のみ、また耕牛の使用という古い農耕に、蔬菜類・栽培・養鶏、トラクター・発電装置の導入などを行ない、農業投資を活発に行ない、生産を拡大させている。しかし、かれが Gorgan の農業資本家のごとくに急激な変動を創造しえなかったのは、土地その他の与件の差というよりは、主体自体の企業心にその要因が求められるべきであろう。しかし、かれが追従的態度をとりはじめたということは、今後においても徐々の変動が期待されるものと思われる。

村(日本の場合は部落)は公共的色彩をもったところではなく、家屋などすべてが地主の私有物となっている。

すなわち、村は地主・または地主たちの私有物であり、地主が生産活動を行なうために意識的に作ったものである。そして、これを基盤として、地主(経営者)が村民の上ですべての点で全能の力で臨んでいるのである。

一方農民の方は、経営者に支配されながらも、身分的に拘束されたり、移動の自由が束縛されたりはしておらず、また、地主に経済外的強制をしいられている事実もない。かれらはグループ作業を行なう share cropper 的労働者であり、職掌内において発展飛躍を期待することはできないが、地主の支配下より脱し独立自主制をもつことも可能であり、さらに村の機構の中で上昇する可能性も与えられている。

新しく生じた変動に対する農民のレスポンスは、きわめて遅いのであるが、ただこの村の場合、技術労働者・工場労働者などの異質階層の出現はそれらに新しい変化を生み出す要因になるのではないか。すなわち、機械技術者に対する村内における評価の上昇社会的地位の向上などは、軍隊の訓練をうけて帰村した青年に衝撃を与えようし、現在は低い地位にありながらも、工場労働者が今後経済的に上昇してゆけば(その可能性もある)、農民の工場労働者化ということも生まれてこよう。この点で、上記 2 階層は、村民の伝統的な Value System を変えるという先駆者的役割を果たすのではなからうかと思われる。

(アジア経済研究所調査研究部第 5 調査室)